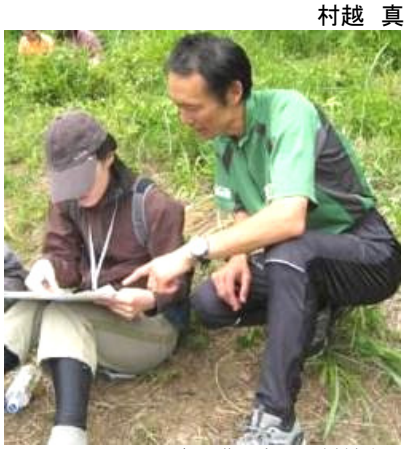
なぜ「ナヴィゲーションスポーツ」なのか？

村越　真



読図講習会での村越さん

2005年ごろから、「ナヴィゲーションスポーツ」という考え方を前面に出し、私自身普及活動を行ってきました。またその一部はＪＯＡでの活動方針にも反映させています。昨年の普及方法研修会でも、伝統的なオリエンテーリングの範疇から外れるキッズO、クイックO、ロゲイニング、読図講習などを取り上げました。またＪＯＡでは、ロゲイニングシリーズをロゲイニング協会と共催しています（各イベントは、各地のクラブその他から自発的に出てきたものです）。

今回の特集の元になったマガジン編集者内部での議論の焦点は、そのような普及の方向性の是非に関してでした。そこで、普及にあたって「なぜナヴィゲーションスポーツなのか？」という点に絞り、私の考えるところを紹介します。

ナヴィゲーションスポーツという考え方を前面に出す理由は、以下の３点です。

①外部との接点を広げる
②誇りを持てるアイデンティティーの確立
③社会的な評価の確立

1. 外部との接点を広げる

1990 年代後半以降、オリエンテーリングは普及に成功してきたとは言えません。努力不足も一因ですし、学校教育や野外活動施設でのプログラムとしての適性が落ちたのも一因だと考えられます（もっとも、教育機関でのオリエンテーリングの普及は、「間違ったイメージを生み、むしろマイナス面もある」という面は否定できません）。

やっていない人でも自然に目に触れる可能性があり、見てかっこいい、と思いにくいオリエンテーリングにとって、とにかくやったことのない人に体験してもらう機会を増やすことが肝心です。

1990 年代、オリエンテーリングは競技として非常に洗練されました。一方で、多くの新参者にとってそのこと自体が敷居になっていると考えられます。クラス分けや複雑な要項、競技ルール、もちろん、コース設定も大きな障壁です。一般の人にとって、獣道のような５番の道を歩くだけでも冒険です。ましてや O-map でようやく表現されるような尾根や谷にあるコントロールを探すのは、「宝探し」に等しい。競技者ならそのようなチャレンジに挑まなければなりませんが、それだけではオリエンテーリングは多くの人にとって手の届かないスポーツになってしまいます。2000 年代前半にアウトドアの他の領域の人やイベントに触れてみたとき、一番感じたのはこの点でした。その接点を広げるためにも、ナヴィゲーションというより広い切り口が必要なのです。

オリエンテーリングとナヴィゲーションスポーツの関係を理解するために、1500m とジョギング／マラソンとの関係を考えてみましょう。1500m は短距離と長距離の中間に位置する非常にハードな競技です。しかし、ゆっくり走れば十分走りきれる距離です。1500m を楽しむには有酸素と無酸素の閾値にある自分をコントロールしつつ最大限の力を出すようにさせるハードな練習が必要です。しかしそれが可能な人は多くはない。一方で、マラソンなら走りきるだけで達成感があります（もちろん、そこに至るトレーニングが必要なことは1500m と変わりませんが）。近年トレランが人気を呼んでいるのも、初級者でも比較的容易に達成感を得られる事と無縁ではありません。オリエンテーリングの最大の面白さもスピードと正確さのバランスにありますが、その醍醐味を感じるのは決して容易なことではありません。ロゲイニングを中心とした長距離・長時間のナヴィゲーションスポーツは、初心者でもオリエンテーリングよりも満足感（達成感）を得られやすい。このようなステップを用意することが普及には必要です。

もちろん、長期的な満足感・達成感のためには、奥の深さも必要です。一時的に楽しいだけのゲームでは、長くは続かないでしょう。初期の徒歩オリエンテーリングはそうだったのだと思います。現在のロゲイニング人気を称して「原点回帰」という声もあります。より多くの人が楽しめるものを提供するという点ではその通りですが、同じ原点に戻ったのではなく、螺旋を一周も二周も登って、平面でみれば原点にいる。ナヴィゲーションスキルを磨いたエリート集団、教授するにたるナヴィゲーションスキルの体系とその指導法の蓄積、などは、螺旋を数周も上がっていることの証と言えるでしょう。1970 年代以前の大衆スポーツのイメージは「苦しさ敬遠」であったが、1980 年代以降、大衆スポーツの中に、確実にストイックに自分を磨く層が発生しています。見かけ上同じ地点にいるように見えても、今後の展開は間違いなく違ったものになるでしょう。

2. スポーツとしてのアイデンティティーの確立と誇り

大学クラブは競技性を隠し、またトリムを新入生には見せないという話を聞いたことがあります。自分が取り組んでいるスポーツに誇りを見いだせないのは悲しいことです。競技人口が少ない故の「マイナー意識」も、オリエンテーリングには広く見られます。誇りを持てるアイデンティティー、それがナヴィゲーションです。野山で移動する競技も走る競技も、健康づくりにつながるスポーツもいくらでもあります。しかし、ナヴィゲーションがスポーツになっているのは、オリエンテーリングだけです（モータースポーツは除く）。

ナヴィゲーションは、アウトドア活動者全員にとっては生命を左右するスキルです。また地図を使ったナヴィゲーションは日常生活でも行われていますが、地図をちゃんと読め、使いこなしている人はアウトドアの世界ですら少ない。多くのオリエンテーリング競技者は「ナヴィゲーションのファンタジスタ」といってもいい存在なのです。「ナヴィゲーション」というキーワードを通して、多くのオリエンティアにそのことを理解してもらいたいと思っています。

もちろん、この点は社会に対する PR が必要です。多くの人が地図を使

ったナヴィゲーションを、失敗も含めて経験することで、ナヴィゲーションの重要性が理解できるとともに、オリエンティアのファンタジスタぶりを理解することができるのです。ここにも接点を広げるべき理由があります。

ナヴィゲーションスキルはオリエンテーリングの中核であり、アイデンティティーであるとともに、誇りの源とも成り得ます。

3. 社会的評価の確立

私たちの資産であるナヴィゲーションスキルは、社会に対して発信することで、アウトドアの安全や日常的な効率に大きく貢献できます。山岳遭難では年間 800 人が道迷い遭難に陥り、そのうち 30 名程度が死亡していますが、その全部ではないにしろ、一定数の人の命を救い得る。さらに遭難予備軍である数万人の人を不安や恐怖から救うこともできる。実際、オリエンテーリングの黎明期には、多くの登山愛好者が読図スキルの習得のためにオリエンテーリングを始めました。現在のオリエンテーリングを支える多くの人材がその中から生まれました。

スウェーデンでは、地域クラブが遭難者の捜索に協力することもあるといいます。余談ですが、先日私の大学の大学院生が道迷い遭難で世間を騒がせました。発見後、救出までに１日以上を要したのは、地形上ヘリでのホイストが不可能であり、現地に隊員を誘導することが難しかったからです。遭難場所は、ヘリからの画像でわかっていました。優秀なオリエンティアがそこにいれば、もっと早く現地に救助隊を導くことができたでしょう。

社会的評価を確立するもう一つの領域が学校教育です。自己決定、自己による危機管理、体力と知力のバランスなど、他のスポーツにはない現代の教育で育てるべき力に対応した特徴を持っています。

一方で、伝統的なオリエンテーリングには課題もあります。安全や地図の準備、忙しい学校教育のスケジュールにマッチしているかどうか。これらの課題を解決して、学校教育で取り扱いやすいオリエンテーリングのヴァリエーションを活用することは、将来のオリエンティアを増やすという普及面でも、オリエンテーリングの社会的評価を確立させる点でも、重要なものです。キッズＯやクイックＯ、トレイルＯは、地図や実施方式など、決して元来のオリエンテーリングと同じものとは言えませんが、従来のオリエンテーリングよりも、学校教育と相性のよい実施法です。

4. 結論

なぜ広がらないのか、に対する私の答え（仮説）は、「接点が狭く、敷居が高いから」です。普及には接点を広げ、敷居を下げることが必要です。そのための具体的な道具立てはこの 10 年で随分確立されました。それをトータルに捉え、ＰＲできるコンセプト、それが「ナヴィゲーションスポーツ」です。あえて加えるならば、オリエンテーリング愛好者自身が、オリエンテーリングの価値に気づいていないこともあげられます。それに対する答えも、「ナヴィゲーション」にあると思います。

1970 年代の当初に徒歩オリエンテーリングから始まった日本のオリエンテーリングは、10 年の内に競技的にも世界的にも評価されるレベルに上がりました。今のようなエリート競技者も、様々な蓄積もない時代です。そのことを考えるとき、今私たちがすべきことは、明確なアイデンティティーを自覚し（威張る必要はないけれど）、誇りを持って多様な外部との接点を模索し続けることだと考えます。

（村越 真）

走るには室内から始める！

藤島由宇

クイックOを説明する藤島さん

普及記事の最後に、私からアイディア…というよりは他のスポーツや、オリエンテーリングの大学生レベルでは行われている事についてお示ししたいと思います。

これまでマガジンやオリエンティアメールでも時折この事は触れているのですが、「小学生オリエンテーリング選手権大会」を市町村、県、全国レベルで開催する手はかなり有効なのではないかと見込んでいます。今のオリエンテーリング界には、全国的にもローカル的にも子どもたちが目指すべき大会が無いのです。

多くのクラブや協会では、毎年初心者向け教室や市民向け大会の主管をされておりますが、恐らく初心者教室を開いても、それを試す場が無いから参加者が集まらないのではないか？というのが私の推し量る所です。

ですからまず提案したいのは、「地域の小学生オリエンテーリング選手権大会」を開催することです。

今まで三条も含め各地で「○○市民オリエンテーリング大会」という名のイベントは開催されておりますが、このイベントのその街に置ける立ち位置と言いますか、スタンスが曖昧で不明確に感じています。別にこの大会に優勝してもそんなに凄いとか、褒められるような感じがしないのです。格が無いという言い方も出来るかもしれません。なぜかと言えば、この「市民大会」は、市民が日々オリエンテーリングの練習をしてその成果を発揮する場として目指す大会ではないからです。

愛知県や東京都など、都道府県単位で「選手権大会」を開催している所はありますが、もっとその範囲を狭めて行う必要があります。そしてそのスポーツの将来があるかどうかは、子どもたちをいかにそのスポーツの虜に出来るか？にかかっています。これが「小学生選手権大会」の開催を提案する理由です。

小学生選手権で優勝すれば地域のオリエンテーリング小学生チャンピオンという称号を得る事ができるわけです。これは子ども（あるいはその家族）にとって大変嬉しい事である事は間違いありません。

優勝すれば連覇を目指して来年も参加するでしょう。一方負けた方はリベンジを果たそうと、これもまた来年参加するでしょう。いずれにせよ「地域の市民大会」よりも遥かに地元参加者のリピーターの獲得が期待できるのです。

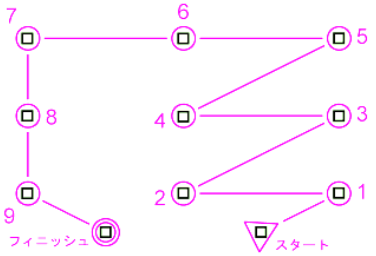
で、もっと速くなりたい、オリエンテーリングの練習がしたいと言う子どもに対してはスクールを設けてあげる（理想はスポ少）…各地域においては、初心者教室と市民大会がリンクしていないから効果が上がっていないのではないかと思います。

「リピーター」と書きましたが、あくまで普及とは仲間を増やす事であり、オリエンテーリング大会の参加者を増やす事ではないという主張にも変わりはありません。仲間を増やすために必要なのがクラブ（スポ少、学校の部活）ということです。

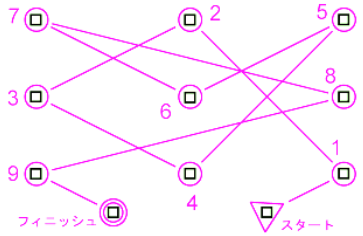
先の乗鞍での小学生大会は、私のこの提案が多少反映されています。

今月（11月）6、7日に岐阜乗鞍で「小学生室内屋外オリエンテーリング大

会」が行われ、私も6日の室内の部（クイック0）の準備で行って参りました。



クイック０　低学年コース



同上　高学年コース

クイック0はこのようにオリエンテーリングが初めての子どもを集めてもタイムを競うスポーツとして成立するコンテンツです。クイック0のみの場合は「小学生室内オリエンテーリング選手権大会」とするのが良いと考えています。

今回は参加者も30人程度であっあのと、時間も2時間半と決まっていたので全員3コースずつ走ってもらいましたが、参加者が増えれば予選決勝方式をとる事になるでしょう。

翌7日に屋外の部と表彰式が行われたのですが、私は6日で引き上げなければならなかったので「クイック0の入賞者に」と三条の詰め合わせのお菓子を多めに用意して行き、岐阜の方に預けました。

後日、岐阜県協会の牧ヶ野さんやご家族で参加された斎藤（旧木植）早生さんからメールをいただきまして、お二人からは「子どもたちはとても喜んでいた」とありました。

上位に入って表彰されれば、子どもはものすごく喜びます。自分も三条市民大会でメダルをもらった時はとても嬉しかった事を今でも覚えていますし、その事が「また来年も参加しよう」とするモチベーションになっていた事は間違いありません。

「賞状・メダル・賞品」の3点セットは、特に小学生の参加するイベントにあっては必須です。多摩OLさんのジュニアチャンピオン大会は見習うべき大会の1つです。

来年もまた乗鞍で同じように大会が開催され、今年参加した子どもたちがまた参加してくれ、更に参加者も今年より増え、将来JWOCに出るくらいの逸材が岐阜から登場すれば、私が乗鞍に行った意味もあったかなと思っています。

私は前にも申し上げましたが、オリエンテーリングを初めての子どもにさせる場合でも、1人で走れる方法で実施するべきであると考えています。

安全上の理由で屋外でグループでさせるならば、むしろ校内などの全員が見渡せる安全な範囲でキッズ0なりクイック0なりスターリレー方式なりの方法を採用した方がよっぽどオリエンテーリングの普及に効果があり、オリエンテーリングの魅力を子どもに伝える事ができるというのが私の主張です。35年前ならいざ知らず、今では「キッズ0」と「クイック0」という初心者でも1人でオリエンテーリングが出来る方法が見つかったのですから。

「グループでさせない方が良い」とする理由はいくつかありまして、いずれも実体験に基づくものです。

・2006年2月号のマガジン記事「もうやめにしませんか？小学生組。」にも書きましたが、村松の大会で5人グループの女子小学生（高学年）がグループのコースを廻って帰ってきた時に、スタッフの方が「君たち、今度は１人ずつ廻って来るんだぞ」とその女の子たちに言った所、女の子たちが「えぇ～！！？？」っという反応を示したこと。

・去年の6月に三条市内の小学4年を対象に、村越さんが巴小などで実施した方法通りに「1人ずつで校内でフリーポイント0」のあと「校外でグループでスコア0」というスケジュールでオリエンテーリングを行いアンケートをとったところ、「また友達と一緒にやりたい」と答えた子どもがほとんどで、「友達と競いたい」と答えた子どもは1人しかいなかったこと。

・今年8月に三条市内のある集落の子どもを対象に、各学年1人ずつを含むグループでのフリーポイントオリエンテーリングを行った際、足の速さの差でグループ内の全ての子どもが楽しめなかったように見受けられたこと。足の速い子は遅い子に合わせなければならず、また遅い子も自分のせいで早くゴールできない事を辛く思い、いずれも楽しさが半減したと思われたこと。

※その後１人ずつクイック0をやりましたが、子どもたちはそれまで暑くてだるそうだったのにクイック0は元気に何回も楽しんでくれました。

・今月の乗鞍で、クイック0の説明の時に「1人で走ってタイムを競います」と話した所、やはりオリエンテーリング経験のある女子小学生から「ええ～！」というどよめきが聞こえたこと。（やはりか…）と思いました。

これまでの私の経験からして、特に5～6年の女子になると、「1人で走るオリエンテーリング」に拒否反応を示す場合が多いように感じています。本当に子どもたちをオリエンティアに育成しようとするならば、小学校低学年のうちから1人で走らせる事が必要と感じています。

「走らせる」と書いていますが、子どもは言わなくても勝手に走ります。乗鞍でも「タイムを競う」とは競技ルール上言っていますが、子どもたちに「走れ」とは1回も言っていません。でもみんな走りました。

どんなスポーツでも好き嫌いや得意苦手があるのですから、1人で走らせてみて楽しくなかったら、その子はオリエンテーリングに縁が無かったものと割り切る必要があります。

少年自然の家などの施設で常設コースを用いてのオリエンテーリングが可能だったりしますが、大抵は安全上の理由あるいは「協調性」や「協働して問題解決する力」を育むという狙いでグループでさせるケースが圧倒的だと思います。そもそも小学校での活動はグループで行う事が基本ということもあるかもしれません。

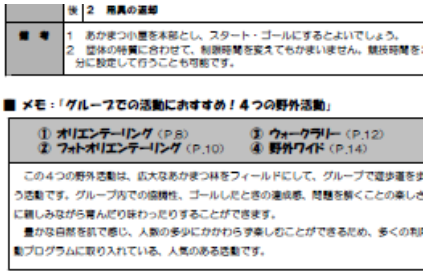
しかし、「1人で走る」オリエンテーリングに協調性や協働して問題解決をする能力が必要かと言えば、そうではありません。オリエンテーリングが歩いても出来てしまうことと同様に、グループで行うと「協調性」や「協働して問題解決する力」がはぐくめてしまうのです。オリエンテーリングで育まれて欲しいのは、自ら考え行動する能力です。

そういう意味でも、私はこのような施設で子どもにグループでオリエンテーリングをさせる事にも否定的な立場です。同じ内容でやるなら「ロゲイニング」か「マップウォーク」など、違う名前で実施して欲しいという考えです。

自然の家でのグループで行うオリエンテーリングと、本来の姿であるはずの1人で走るオリエンテーリングとは違う事をやっているのです。名前を変えて当然と思っています。

【参考】新潟県少年自然の家の野外活動プログラム

「オリエンテーリング」と「フォトオリエンテーリング」がありまして、いずれもグループで行う事を前提としています。


後 2 用具の選部

備考
1 あかまつ小屋を本部とし、スタート・ゴールにするとよいでしょう。
2 体体の特質に合わせて、制限時間を変えてもかまいません。競技時間を分に設定して行うことも可能です。

■ メモ：「グループでの活動におすすめ！4つの野外活動」

① オリエンテーリング（P.8）　③ ウォークラリー（P.12）
② フォトオリエンテーリング（P.10）　④ 野外ワイド（P.14）

この4つの野外活動は、広大なあかまつ林をフィールドにして、グループで遊歩道をまう活動です。グループ内での協調性、ゴールしたときの達成感、問題を解くことの楽しさに親しみながら育んだり味わったりすることができます。
豊かな自然を肌で感じ、人数の多少にかかわらず楽しむことができるため、多くの利動プログラムに取り入れている、人気のある活動です。

新潟県少年自然の家活動紹介から

このような施設で初めてオリエンテーリングを行う子どもたちはたくさんいます。最初のオリエンテーリングの体験がグループで行われるから、「オリエンテーリングはグループで行うもの」というイメージが付くのだと考えています。そしてその後で「オリエンテーリングは1人で走るスポーツですよ」と聞かされると、子どもはショックを受けるのです。

このような野外活動施設で「オリエンテーリング」ができてしまうことが、実は1人で走るオリエンテーリングの普及を阻害する要因になっていると感じます。オリエンテーリングのチュートリアルにもなっていないし、現場の方も学校側もそこまでの認識を持っていないのが現実です。

（藤島由宇）

岡山県協会の取り組み

佐藤旭一

全国的に OL 人口の減少がいわれていますが岡山県も例外ではありません。要因は種々あり地域によってそのウエートも異なると思いますが、当県が認識する一番の要因は「場の提供不足」と考えました。

その反省のもと数年前にありたい姿も掲げた長期計画を策定し、「初心者に配慮したイベントであるとともに、いわゆるオリエンティアにも満足してもらえる大会志向」をモットーに、大会、初心者向け講習、各種体験活動に取り組んできました。

以下はその活動の重視ポイントです。（一部近況含む）

・大会のテレインは繰り返し使ってでも開催頻度を上げることを優先し、毎年おなじみのイベントにする。ただしマンネリ化にならないよう気づき事項を都度「イベント改善事項」に記録し改善を計る。

なお、開催頻度増による運営負担を抑えるため、要項、プログラム、運営要領、準備スケジュール、準備物件の段取り等標準モデルを整備し省力化する。

・グループクラスは多様な参加層に配慮し、チャレンジ、ハッスル、ジュニア、体験クラス等のクラスを設け軽んじることなく個人クラスと対等に扱う。キッズ 0、初心者向けトレイル 0 も極力併設する。

またコース、会場レイアウト、競技形態も個人クラスと一体で扱い、個人の競技風景がよく目に触れるよう配慮する。なおコース地図はグループメンバ全員に配布するよう昨年度から改めた。

・参加慣れしない層に余分な負担を与えないため、参加費は極力抑え当日徴収とし、スタート時刻も受付で参加者と調整してから決める。もちろん当日参加申し込みも参加費以外は全く同等に扱い、当日用見込地図の余りや事前申込者の当日不参加はやむを得ないと割り切る。

・アンケート用紙を配布し得られた感想、意見を即反映する。これらをもとに受け付けの改善、EMIT 導入、給水所の設置、クラス追加等種々改善を計ってきた。

・広報は県協会サイトでの紹介とともに、記者クラブへの投げ込み、新聞のイベント紹介欄への掲載と成績結果の掲載、地元行政広報誌への掲載等地元への広報を重視する。このため社会的認知度を得るべく、県、県教委、地元行政、同教委の後援は必ず取り付ける。

これまで NHK テレビでも 2 回特集してもらったが、CATV、FM を含めたラジオ放送、新聞取材記事等毎年複数のイベントを複数のメディアに取り上げてもらっている。

今年４月の岡山県白石島での
オリエンテーリング大会でのテレビ取材

・初心者講習、体験活動ではパワーポイントによる説明資料を 100 コマ以上用意し、プロジェクタを使って入門編（抜粋）、入門編、テクニック編等目的と対象者に応じた内容をスライドショーで説明する。また「配布資料」形式で印刷し全員に配布する。

・イベントの参加者推移を一覧にし、ベンチマークとして把握分析し改善につなぐようにする。

・OL が県内の少しでも多くの人に親しまれ楽しんでもらえるよう、その橋渡しになれればとの思いを編集の基本スタンスにして web サイトを立ち上げている。

イベントの案内、結果等を都度詳しく掲載しているが、多くの方に親しみを持って見ていただいているようである。

その成果は確実に現れており、方針は間違っていなかったと確信しています。06 年度 2 大会と 3 つの初心者イベントで約 300 名の参加者でしたが、09 年度は 5 大会、3 つの初心者イベントで約 700 名の参加を得ました。

特徴的なことは、初心者、特にグループ参加者が多く県外からのオリエンティアも徐々に増えてきており、リピーターの人が新しい人を誘っていただいている様子もうかがわれます。

JOA 主催の普及方法研修会の内容に基づき分析すると「未体験者を体験者にするための施策は順調」、「オリエンティアの満足度を得る施策も順調」であるが、「体験者を愛好者（初中級者）にするための施策は十分とは言えない」と判断しています。

これらを踏まえて、従来からのモットーに今年度「初心者をホスピタリティあるオリエンティアに育てる」を加え、スキルアップしながら仲間意識を培うための練習会兼初心者教室、運営研修会のイベントを新たに設けました。大会ではルートアナリシスの場を設け、初中級者に対する競技後のケアにつなげる試みを始めました。また広島県とタイアップし「山陽路パークＯシリーズ戦」も始めました。

小生らがＯＬにはまり込んだ時代と環境は大きく異なり価値観も多様ですが、このスタンスでの活動を続けていけばＯＬの魅力とその価値について共感を得て、ともに歩もうとされる方が多くでてこられるものと信じています。

一方、我々弱小のローカル組織、いつまでもＯＬ黎明期からのメンバーが中核ではどうにもなりません。5 年先 10 年先を見据え、組織が化石にならぬよう生き抜き、かつ成長させるため、県協会として限られたリソースを有効に活用しながら、パイを拡げていく取り組みが不可欠と判断しています。

そのようなことを総合判断し、OL 黎明期からのクラブの枠にとらわれず県協会として一体となり、リソースを効果的に使った組織的な活動が何より重要のスタンスで臨んでいます。結果としてクラブの活性化にもつながれば、これに越したことはありません。

限られたリソースの中、もんじゅみたいに投入する力以上のエネルギーが将来の県協会にバックしてくることを信じて取り組んでいます。

最後に全く別の観点からですが、木村佳司さん、山川さん、的場さんのご支援により開催できた 2005 年全日本リレー大会の成功体験が、当県協会の普及活動取り組みへの大きな動機付けになっていることは申すまでもなく、弱小組織で考慮すべき重要なポイントと思っています。先般トレイル 0 協会が全面的に支援して開催された「トレイル 0 四国 in まんのう」はまさにそれだと思います。

（佐藤旭一）

岡山県協会主催大会参加者数の変化

	2006 年度		2007 年度		2008 年度		2009 年度		2010 年度	
	個人	グループ	個人	グループ	個人	グループ	個人	グループ	個人	グループ
白石島大会	30 名	22 組 65 名	39 名	26 組 70 名	30 名	32 組 108 名	47 名	35 組 125 名	30 名	41 組 145 名
	52 組 95 名+5 名		65 組 109 名+7 組 25 名		62 組 138 名+11 名		82 組 172 名+14 名		71 組 175 名+21 名	
福田公園大会	17 名	8 組 13 名	13 名	7 組 18 名	18 名	9 組 32 名	20 名	7 組 17 名		
	25 組 30 名+3 組 13 名		20 組 31 名+11 組 20 名		27 組 50 名+8 組 15 名		27 組 37 名+18 名			
操山大会			26 名	9 組 26 名	26 名	16 組 60 名	50 名	9 組 27 名		
	-		35 組 52 名		42 組 86 名		59 組 77 名		-	
吉備高原大会					34 名	12 組 34 名	51 名	11 組 36 名		
	-		-		46 組 68 名		62 組 86 名			
トレイル＆パークO大会							26 名	17 組 48 名		
	-		-		-		43 組 74 名			
ライフパーク地図読み講座	12 名×2 回、20 名×2 回		29 名×3 回		37 名×3 回		17 名×3 回			
スポレク inＯＫＡＹＡＭＡ	20 組 60 名		44 組 125 名		52 組 126 名		56 組 100 名			
レク祭り in 桃太郎アリーナ	-		-		-		26 組 61 名			
秋の里実りのフェスティバル	20 名		-		-		-			
インストラクタ養成講習会	-		-		-		3 名			
大会運営勉強会	-		-		-		-		9 名	
練習会	-		-		-		-		12 名(#1)/10 名（#2）	
参加者総数	**287 名**		**449 名**		**605 名**		**693 名**			

きのこ新入職員研修	39 名	50 名	50 名	37 名	34 名
中学生自然教室(福田南中)	180 名	176 名	-	-	
中学生自然教室(多津美中)	-	166 名	-	-	
笠岡 JC	30 名	-	-	-	
中国女子短大生研修	-	-	100 名	-	
参加者数	249 名	392 名	150 名	37 名	

※各下段の＋～がある部分は、トレイルO、キッズクラス、お遍路クラス等の参加者数